

聴覚障害学生への情報保障に対する大学教員の意識について

(特別支援教育講座) 菊川佳苗
(特別支援教育講座) 高橋信雄

University Teacher's Consciousness to the support for the students with hearing impaired

Kanae KIKUKAWA and Nobuo TAKAHASHI

(平成21年6月5日受理)

1. はじめに

近年、聾学校高等部卒業者が大学などの高等教育へ進学する数が増加しており、特に大学への進学者数の増加は著しい。地域の通常高等学校に通う聴覚障害生徒も加えると、聴覚障害者の高等教育への進学者数はさらに多くなっている。

大学の講義は高等学校までの授業とは違い、教科書や板書など視覚的な情報が少なく、専門的な内容を少ない資料で、また音声のみで行う場合が多い。講義の形式や内容などの講義者側の要因と、聴覚障害学生の聴力レベルなどの受講側の要因によっても差はあるが、通常、重度の聴覚障害学生が口話のみで講義を理解することは著しい困難さが伴うと考えられる。さらに、教員の中には試験範囲やレポート課題などを講義中に口頭のみで伝える教員もいる。試験やレポートは全ての学生にとって単位等の面で極めて重要なことであるため、こうした情報は、聴覚障害学生に限らず、全ての学生にきちんと伝えられなければならない。

聴覚障害学生の情報保障（講義保障）の手段として、多くの大学で行われているのが、教員の話を手書きノートなどに書き取るノートテイクである。白澤（2005）によれば、聴覚障害学生が在籍している（していた）大学が講義上でのサポートとしてノートテイクを配置しているところは、44.4%あるとされている。

これまでの研究において、教員を対象とした調査では、障害全般を対象とした意識調査はあっても（田中2007）、聴覚障害を対象とした意識調査はされていない。

聴覚障害学生を支援するためにノートテイクなどの情

報保障活動を行うことは大切ではあるが、聴覚障害学生にとってより良い支援をするためには、情報保障の行われているクラスの学生や教員に聴覚障害学生が受講していることを知ってもらい、支援に協力してもらうことも必要になってくると考える。

2. 愛媛大学の情報保障体系について

1) 現在までの経緯

1995年度に重度の聴覚障害学生が入学し、その学生に対して友人らが自主的にノートテイクで支援するなど、学生間での支援が続いた。

2002年度からは「登録ボランティア制度」を設け、大学での取り組みとして聴覚障害学生を支援してきた。

2007年度よりそれまでノートテイクをしている学生の代表者が行ってきたノートテイク派遣等のコーディネート業務を、大学に配置された専任の職員が行うこととなった（学生代表者団体（CBP：旧HSSV）は引き続き存在している）。

2) 現在の愛媛大学の情報保障体制について。

ノートテイク利用者は2008年12月現在、教育学部1名、農学部1名の計2名である。2006年度の利用者はこれまでで最も多く、教育学部5名（学部2名・大学院3名）、工学部1名、法文学部の計7名であった。

登録テイク数は、2008年度は69名であり、実際にノートテイクをしている人の数は2008年11月現在28名（活動率42%）となっている。

支援の方法は、主に手書きのノートテイク（原則、利用者1名に対してテイク2名）であるが、利用者の希

望により手話通訳での支援も行う。入学式や卒業式といった式典では、パソコン要約での情報保障も行われている。

3. 研究目的

愛媛大学の教員の聴覚障害学生支援に対する意識を調べ、愛媛大学における聴覚障害学生への情報保障体制の問題点や課題を考察し、今後の支援に役立てる。

4. 研究方法

- 1) 対象者：愛媛大学の各学部に所属する全教員とした。
- 2) 手続き：各学部の教員宛てにアンケートを配布し、校内便にて返送してもらう。
- 3) アンケート内容について
 - ・聴覚障害学生の在籍認知
 - ・聴覚障害学生受講講義の担当の有無
 - ・聴覚障害学生と接しての戸惑い
 - ・支援方法の認知
 - ・支援方法の印象
 - ・支援の有無での理解度合いの予想
 - ・他の教員の行なっている支援内容への興味
 - ・勉強会への参加意欲
- 4) 実施期間：平成20年8月
- 5) アンケートの回収率

全学部での回収率は21%（159人）であった。学部別の回収率は、法文学部12%（14人）、教育学部19%（21人）、工学部10%（14人）、理学部23%（19人）、農学部20%（20人）、医学部31%（71人）であった。

表1 アンケートの回収率

	回答人数	回収率
法文学部	14人	12%
教育学部	21人	19%
工学部	14人	10%
理学部	19人	23%
農学部	20人	20%
医学部	71人	31%
合計	159人	21%

また、回収したアンケート159人分の間での年齢構成では、39歳以下が32%（51人）、40歳代が34%（54人）、50歳代が21%（32人）、60歳代が10%（16人）であった。

なお、全教員（無回答者も含）の年齢構成は不明であるため、年齢別の回収率は求めなかった。

5. 結果と考察

1) 全教員の回答傾向について

①現在、愛媛大学に聴覚障害学生が在籍していることを知っているか。

「知っている」と回答した教員は全体の48%、「知らない」と回答した教員は全体の50%、無回答が2%であった。このことから、ほぼ半数の教員が聴覚障害学生の在籍を知っていることになる。

②聴覚障害学生の在籍をいつ・どのように知ったか。

【いつ】：聴覚障害学生の在籍を知った時期では「今年度」が11%、1～3年前が17%、それ以前が18%、その他、「講義」や「会議」などの時期を特定できないものが24%、無回答が30%であった。

【どのように】：聴覚障害学生の在籍を知った経緯としては「聴覚障害学生が担当講義を受講していた」が26%、「事務からの書類など」（事務連絡）が22%、「テイカー募集の貼り紙など」が12%、「テレビやホームページで」や「教員同士の話の中で」「初任者研修で」といった「その他」が29%、無回答が11%であった。

③聴覚障害学生本人を知っているか。

聴覚障害学生本人を「知っている」と回答した教員は30%、「知らない」と回答した教員は67%、無回答が3%であった。このことより、「知っている」と回答した教員は30%程度であり、聴覚障害学生の在籍を知っている教員の約3人に1人は聴覚障害学生本人を知っていると考えられる。

④聴覚障害学生が受講している講義を担当したことがあるか。

聴覚障害学生が受講している講義の担当経験に関しては、「現在担当している」が8%、「過去に担当したことがある」が43%、「担当したことがない」が49%であった。

現在担当している教員と過去に担当していた教員を合わせると、聴覚障害学生の在籍を知っている教員の約半数（51%）が、聴覚障害学生が受講している講義の担

当経験があると回答している。

⑤初めて聴覚障害学生の受講講義を担当した時、対応等に戸惑いを感じたか。

聴覚障害学生の受講講義を担当した初期のとまどいについて「とても感じた」が5%、「感じた」が35%、「あまり感じなかった」が47%、「感じなかった」が13%であった。戸惑いを感じた教員（「とても感じた」と「感じた」を合わせた数）は40%であり、聴覚障害学生の受講講義の担当経験のある教員の半数以上は担当初期の段階でも聴覚障害学生への対応に戸惑いを感じていなかったようだ。

【戸惑いを感じた理由（自由記述）】

「戸惑いを感じた理由」としては、対応の方法や内容が伝わるかどうかなど、教員自身の行動に関する不安が挙げられていた。記述されていた主な理由は下記の通りである。

- ・ どのように指示したらいいのか分からない。
- ・ 内容が伝わるか不安だった。
- ・ 事前に情報がなかった（心の準備ができていなかった）。
- ・ どう対応すればいいのか分からなかった。

【戸惑いを感じなかった理由】

「戸惑いを感じなかった理由」としては、テイカーがいたことや、本人の自覚があるはずなど、聴覚障害学生の環境に関する意見が挙げられていた。記述されていた主な理由は下記の通りである。

- ・ テイカーがいた。
- ・ 本人が1番自覚している。大した障害ではない。
- ・ 大学としては当然。
- ・ 本人から要望等がなかったから。
- ・ 受け答えなどから障害を感じなかったため。

⑥現在、聴覚障害学生への対応に戸惑いを感じるか。

現在の聴覚障害学生への対応に対する戸惑いについて「とても感じる」が3%、「感じる」が8%、「あまり感じない」が67%、「感じない」が19%、無回答が3%であった。現在戸惑いを感じないと回答した教員は、「あまり

感じない」と「感じる」と回答した教員を合わせると86%であり、聴覚障害学生の受講講義を担当した経験のある教員のほとんどが、現在戸惑いを感じていないと回答している。

【戸惑いを感じる理由（自由記述）】

「戸惑いを感じる理由」としては、聴覚障害学生が替わるなど前回と違う環境に対する不安を挙げていた。記述されていた主な理由は下記の通りである。

- ・ 大人数講義でなく、少人数講義では対応の仕方が違うだろうから。
- ・ 聴覚障害学生が替わると対応も替わると思う。

【戸惑いを感じない理由】

「戸惑いを感じない理由」としては、「聴覚障害学生への対応の仕方がわかった」というように、経験から得られる自信などが挙げられていた。記述されていた主な理由は下記の通りである。

- ・ 慣れた。
- ・ 対応の仕方が分かった。
- ・ ノートテイカーがいた。
- ・ いて当然。対処するだけ。

⑦聴覚障害学生に対して配慮をしているか。

聴覚障害学生の受講講義の担当経験のある教員で聴覚障害学生に対して「配慮をしている」と回答した教員は87%、「配慮をしていない」と回答した教員は13%であった。

このことより、聴覚障害学生の受講講義の担当経験のある教員のほとんどが、聴覚障害学生に対して何らかの配慮をしている（していた）と回答している。

【配慮の方法（自由記述）】

配慮の方法としては、前の方に座らせたり、資料を配付したりと聴覚障害学生本人に対する配慮と、ゆっくり話すなどノートテイカー等の支援者に対する配慮の両方が挙げられていた。

- ・ ゆっくり話す。
- ・ 板書を多くする。
- ・ 大きな声で話す。

- ・ 資料を配付する。
- ・ 前の席に座らせる。
- ・ テイカーとの打ち合わせ。

【配慮しなかった理由（選択肢）】

配慮しない理由では、配慮の方法が分からないとする教員もいるが、配慮していない教員のほとんどはノートテイクなどがついていないことによって、教員側の配慮を必要としないと考えているようだ。

- ・ テイカーがいるから。(2人)
- ・ 特に配慮を必要としていないから。(2人)
- ・ 配慮の方法が分からない。(1人)

⑧聴覚障害学生への支援として知っているものは？（複数回答可）

聴覚障害学生への情報保障方法の認知として、ノートテイクは57%、パソコン要約は21%、手話通訳は42%であり、どの方法も知らない教員は36%であった。このように、大学で主に行われているノートテイクが1番認知度が高く、ほとんど行われていないパソコン要約が1番認知度が低かった。また、約4割の教員が3つの支援方法を全く知らないと回答していた。

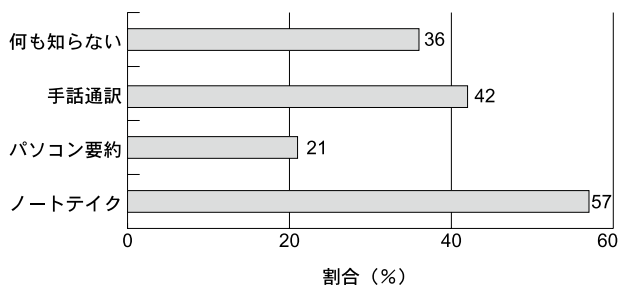


図1 聴覚障害学生支援の方法に対する認知度

⑨それぞれの支援についてどう思うか。

ノートテイクに対しての考えについて、ノートテイクを知っている教員のうち「とてもいい」が54%、「いい」が39%、「少し不公平」が3%、「不公平」が0%、無回答が3%であった。また、パソコン要約に対しての考えについて、パソコン要約を知っている教員のうち「とてもいい」が32%、「いい」が44%、「少し不公平」が12%、「不公平」が6%、無回答が6%であった。さらに、手話通訳に対しての考えについて、手話通訳を知っている教員のうち「とてもいい」が39%、「いい」が45%、「少し不公平」が5%、「不公平」が5%、無回答が6%で

あった。どの支援方法に対しても「とてもいい」と「いい」と回答した教員を合わせると、80%程度は支援方法はいいと思うと回答している。愛媛大学で主に行なわれているノートテイクに肯定的な回答が一番多く、ほとんど行われていないパソコン要約に対していいと思うという意見は一番少なかった。

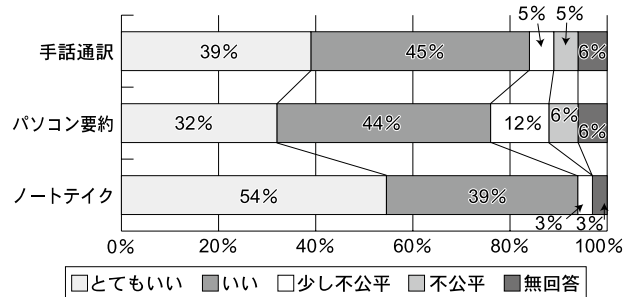


図2 各支援に対する考え

【ノートテイク（自由記述）】

ノートテイクに対しては、誰にでも出来る点や、愛媛大学で行なわれている点で、肯定的な意見が挙げられる一方、常に書いているテイカーの負担や聴覚障害学生の愚行（居眠りなど）に対する不公平だとする意見も挙げられた。

主な意見を下記に記述する。

(良いと思う理由)

- ・ 聴覚障害学生が理解しやすい。
- ・ 他に方法がない。
- ・ 講義は口頭で話すことが多いから。
- ・ 実際に利用している。
- ・ 学生にも協力が可能であるため。
- ・ 周囲にも影響がない。
- ・ テイカーにとっても得るもの大きい。

(不公平だと思う理由)

- ・ テイカーの負担が大きい。
- ・ 聴覚障害学生が授業に参加していない（居眠りなど）場合、不公平。

【パソコン要約筆記】

パソコン要約に関しては、情報量が多くなることやそれに伴う教員の負担軽減など肯定的な意見が挙げられる

一方、パソコンなどの機器の準備、キーボードのタイプ音によって講義に支障がきたされるのではないかなど不公平だとする意見が挙げられた。

主な意見を下記に記述する。

(良いと思う理由)

- ・ 支援する学生にも良い影響があると思う。
- ・ 情報量が多い。
- ・ 教員の負担が減る。
- ・ 理解を助ける。

(不公平だと思う理由)

- ・ 機器が必要になるため。
- ・ タイプの音が気になると思う。
- ・ 聴覚障害学生だけにこのような支援をするのは不公平。
- ・ ノートテイクで十分。
- ・ 今愛媛大学でやっていないから（大学でやっていないのは、不公平だからではないのか）。

【手話通訳】

手話通訳に関しては、即時性や質疑応答がスムーズになるなどの肯定的な意見が挙げられたが、常に動くもの（手話）があることで周囲も講義に集中できなくなる、専門的な内容をきちんと通訳できる人を確保できないなどで不公平だとする意見が挙げられた。

主な意見を下記に記述する。

(良いと思う理由)

- ・ 理解を助ける。
- ・ 講義のスピードに合わせられる。
- ・ 即時性がある。
- ・ 質疑応答がスムーズになる。
- ・ 聴覚障害学生が前を向くことができる。

- ・ 他の学生にも良い影響を与えると思う。

(不公平だと思う理由)

- ・ 技術が必要になり、通訳が大変（専門的内容を十分通訳することはできない）。
- ・ テイクで十分。
- ・ 周りが気になる（集中できない）。
- ・ 誰にでもできることではないため。

⑩聴覚障害学生は支援のある・なしによって授業理解度がどの程度違うと思うか。

支援の全くない状態での講義内容の理解度予想では、「0～20%」が26%、「21～40%」が31%、「41～50%」が9%、「51～60%」が4%、「61～80%」が7%、「81～99%」が4%、「100%」が0%、無回答が20%であった。

ノートテイクがある状態での講義内容の理解度予想では、「0～20%」が3%、「21～40%」が4%、「41～50%」が4%、「51～60%」が7%、「61～80%」が42%、「81～99%」が19%、「100%」が4%、無回答が16%であった。

パソコン要約がある状態での講義内容の理解度予想では、「0～20%」が0%、「21～40%」が3%、「41～50%」が6%、「51～60%」が15%、「61～80%」が42%、「81～99%」が21%、「100%」が3%、無回答が9%であった。

手話通訳がある状態での講義内容の理解度予想では、「0～20%」が2%、「21～40%」が2%、「41～50%」が2%、「51～60%」が15%、「61～80%」が26%、「81～99%」が25%、「100%」が3%、無回答が26%であった。

このことより、支援が全くない状態では、半数以上の教員は授業理解度は50%以下であると考えているようだ。支援があることによって理解度は上がると考えられ

表2 支援の有無による授業理解度の予想

理解度の予測値 (人数)	0～20%	21～40%	41～60%	61～80%	81～99%	100%	無回答
支援なし (111人)	29	34	14	8	4	0	22 (人)
ノートテイクあり (90)	3	4	10	38	17	4	14
パソコン要約あり (30)	0	1	7	14	7	1	3
手話通訳あり (65)	1	1	11	17	16	2	17

表中の数値は、回答者数を示してある

ているが、どの項目においても1番数値が高いのは理解度61~80%であった。

⑪支援によって講義内容がどの程度押さえられているか興味あるか。

支援による講義内容の押さえ具合についての興味に対して「かなりある」が16%、「ある」が56%、「あまりない」が21%、「ない」が3%、無回答が4%であった。

あると回答した教員は「かなりある」と「ある」と回答した教員を合わせると72%であり、約4人に3人の教員は支援によってどの程度押さえられているか興味を持っていると回答している。

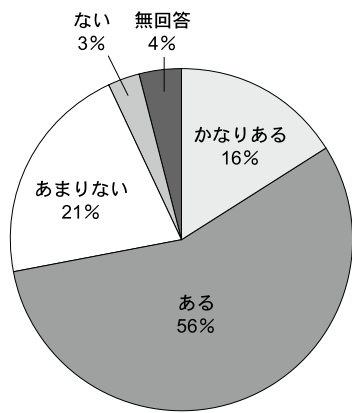


図3 講義の押さえの程度に対する興味

⑫講義中に支援をしていると、気にかかるか。

講義中の支援に対して「常に気になる」が4%、「たまに気になる」が22%、「あまり気にならない」が38%、「全く気にならない」が26%、無回答が10%であった。

気にならないと回答した教員は「あまり気にならない」と「全く気にならない」と回答した教員を合わせる

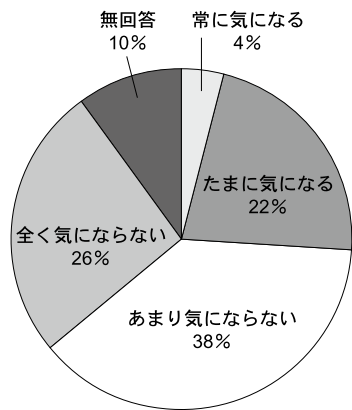


図4 講義中支援が気になるかどうか

と64%になり、半数以上の教員は講義中に支援が入っていても気にならないと回答している。

⑬他の教員の支援方法に興味はあるか。

他の教員の支援方法に対する興味に対して「かなりある」が10%、「ある」が56%、「あまりない」が28%、「ない」が3%、無回答が3%であった。

興味があると回答した教員は「かなりある」と「ある」と回答した教員を合わせると66%であり、約3人に2人の教員が他の教員の対応の仕方(支援方法)に興味を持っていると回答している。また「あまりない」と回答した教員の中には、「自分が担当しなければ、参加したいとは思わない」と回答している教員も数人いた。

⑭聴覚障害学生支援の勉強会に参加したいと思うか。

聴覚障害学生支援の勉強会に「ぜひ参加したい」は5%、「参加したい」は41%、「参加したくない」は39%、「全く興味ない」は9%、無回答は6%であった。

勉強会に参加したいと回答した教員は「ぜひ参加したい」と「参加したい」と回答した教員を合わせると46%であり、ほぼ半数の教員が勉強会に対する意欲を

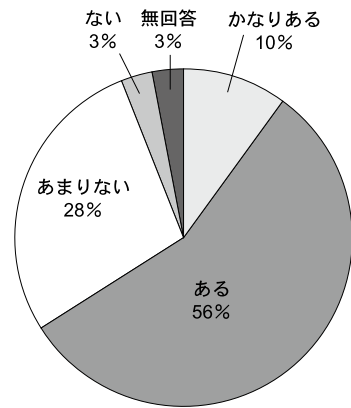


図5 教員の聴覚障害学生支援への興味

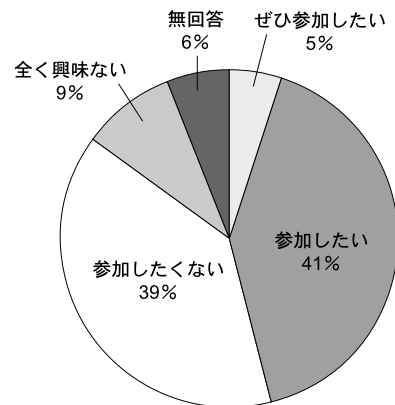


図6 聴覚障害学生支援の勉強会の参加意欲

持っている」と回答している。

⑤その他（自由記述）

- ・ 聴覚障害学生の受講は、講義開始前に教えて欲しい。
- ・ 在籍している聴覚障害学生の状況が分からない。
- ・ 聴覚障害学生がどのような支援を希望しているか具体的に知らせて欲しい。

上記の全教員のアンケート結果をまとめると、図1より聴覚障害学生の在籍の認知は半分程度であった。また、聴覚障害学生の受講経験のある教員の中には、聴覚障害学生本人のコミュニケーションの様子から「聴覚障害の程度が軽い」や「障害を感じないため」と判断し、聴覚障害学生に対して支援していない教員がいた。このようにして授業を受講できるのは、聴覚障害学生の努力によるものであり、教員の支援が全く必要ないわけではないと考える。聴覚障害学生支援の方法（図1）については、愛媛大学であまり行なわれていないパソコン要約は認知度が低く、タイプの音が気になるなどの否定的な意見が見られた。また、ノートテイクなどの支援方法は知っているが、「受講学生が支援するのは大変」や「ノートを取ることは聴覚障害学生でもできる」などという回答もあり、支援の具体的な方法（内容）に対しては教員に十分に理解されていないのではないかと考えられる。

一方で、支援の内容や他の教員の支援方法、勉強会などに対する興味を持っている教員も多くいた。これらの教員を対象とした研修などを設ける必要があるのではないかと考える。

その他、自由記述欄には、聴覚障害学生の在籍状況や受講状況に対する情報を求める意見がいくつか記述されていた。

2) 聴覚障害学生の在籍学部間での比較

現在または過去3年以内に聴覚障害学生が在籍していた学部（法文学部・教育学部・農学部・工学部、計69人）と在籍していない学部（医学部・理学部、計90人）での比較をした。

①聴覚障害学生の在籍を知っているか。

聴覚障害学生が在籍している（していた）学部では、聴覚障害学生の在籍を「知っている」が74%、「知らない」が25%、無回答が1%であった。一方、聴覚障害学生

が在籍していない学部では、聴覚障害学生の在籍を「知っている」が28%、「知らない」が70%、無回答が2%であった。

このことより、聴覚障害学生が在籍している（していた）学部と在籍していない学部では、聴覚障害学生の在籍認知に48%の差が見られた。

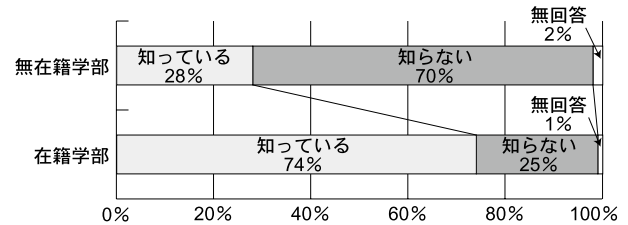


図7 聴覚障害学生の認知

②聴覚障害学生への支援で知っているものは？（複数回答可）

聴覚障害学生が在籍している（していた）学部でノートテイクを知っている教員は80%、パソコン要約を知っている教員は35%、手話通訳を知っている教員は49%、支援方法を全く知らない教員は20%であった。一方、聴覚障害学生が在籍していない学部でノートテイクを知っている教員は39%、パソコン要約を知っている教員は11%、手話通訳を知っている教員は36%、支援方法を全く知らない教員は52%であった。

ノートテイクでは41%、パソコン要約では24%、手話通訳では13%の差が見られ、どの支援方法も、聴覚障害学生が在籍している（していた）学部の方が認知度が高かった。一方、何も知らない教員の割合は両者で32%の差が見られ、無在籍学部の方が高かった。

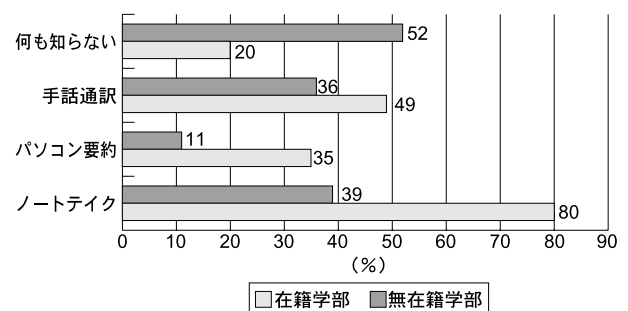


図8 聴覚障害学生への支援方法の認知

③聴覚障害学生支援の勉強会に参加したいか。

勉強会の参加意欲に関しては、聴覚障害学生が在籍している（していた）学部で「ぜひ参加したい」が9%

「参加したい」が38%、「参加したくない」が36%、「全く興味ない」が6%、無回答が12%であった。一方聴覚障害学生が在籍していない学部では「ぜひ参加したい」が2%、「参加したい」が42%、「参加したくない」が41%、「全く興味ない」が12%、無回答が2%であった。

聴覚障害学生が在籍している（していた）学部でも在籍していない学部において、勉強会に対する各選択肢での差はそれぞれ7%以内であった。

以上のことより、聴覚障害学生の在籍の有無での結果をまとめると、図7、図8より聴覚障害学生の在籍認知と支援方法の認知については、聴覚障害学生の在籍している（していた）学部の方が有意に高かった。

3) 支援方法の認知での比較

聴覚障害学生支援の方法（ノートテイク・パソコン要約・手話通訳）を1つでも知っている教員（101人）と、全く知らない教員（58人）での比較。

①聴覚障害学生の在籍を知っているか。

支援方法を1つでも知っている教員では、聴覚障害学生の在籍を「知っている」が73%、「知らない」が25%、無回答が2%であった。一方、支援方法を全く知らない教員では聴覚障害学生の在籍を「知っている」が3%、「知らない」が95%、無回答が2%であった。支援方法を知っている教員・知らない教員との間で聴覚障害学生の在籍認知に70%の差が見られた（図9）。

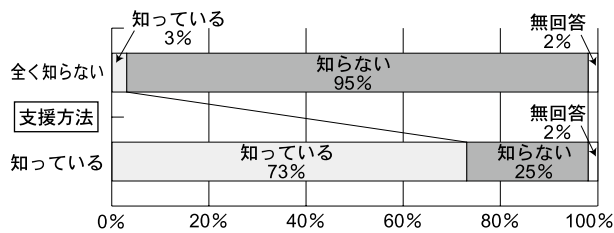


図9 聴覚障害学生の認知と支援方法の認知度

②聴覚障害学生支援に関する勉強会に参加したいか。

勉強会への参加意欲に関して、支援方法を1つでも知っている教員では、「ぜひ参加したい」が6%、「参加したい」が42%、「参加したくない」が37%、「全く興味ない」が9%、無回答が7%であった。一方、支援方法を全く知らない教員では「ぜひ参加したい」が3%、

「参加したい」が40%、「参加したくない」が43%、「全く興味ない」が10%、無回答が5%であった。

支援方法を知っている教員・知らない教員において、勉強会に対する各選択肢での差はそれぞれ6%以内であり、有意な差は認めなかった。

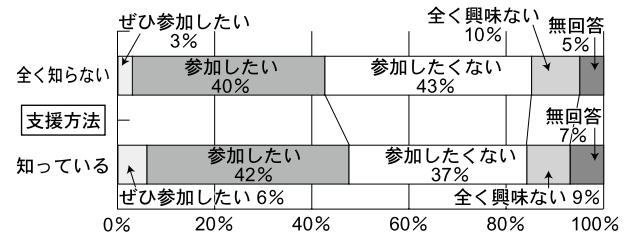


図10 勉強会への参加意欲と支援方法の認知度

以上のことより、支援方法の認知による結果をまとめると、支援方法を1つでも知っている教員の方が、聴覚障害学生の在籍を知っている割合が高いことから両者は相補的な関係にあると思われる。一方、勉強会の参加意欲に関しては、両者に有意な差は見られなかった（図10）。

こうした結果からも、より幅広い教員対象のFDや勉強会を開催する意義はあると考えられる。

6. まとめと今後の課題

今回アンケートを実施し、大学で主に行われているノートテイクの認知度は、回答した教員の60%にも満たず、教員の間ではノートテイクでさえ十分認知されていない実態が再確認できた。今回のアンケートでは、支援方法（ノートテイク）は聞いたことがあるが、支援の詳細なこと（内容など）はわからない、という回答がいくつかあった。このように、聴覚障害学生支援に対する教員の情報不足が大きく影響していると思われる。

一方で、約半数の教員が勉強会への参加意欲を示していることから、聴覚障害学生のサポート状況・在籍状況などの情報を得たい状況にあると考えられる。しかしながら、そのために費やす時間や機会を捻出することが難しい現状の中で、大学全体で聴覚障害学生をサポートする体制を構築するためには、情報保障（ノートテイクなど）に関する情報、聴覚障害学生に対する情報等、様々な情報をできる限りリアルタイムに発信し、誰もが活用できるようにする必要があると思われる。

今後の課題としては、アンケートの回収率を上げ、より正確な愛媛大学の教員の意識を調べる必要があると共に、教員対象のFDなどの勉強会への参加によって、どのように意識が変容していくかなどを検討していく必要があると考える。さらに、ノートテイクの学生団体（CBP）と教員組織（障害学生修学支援委員会）の双方が協力し、互いの力を高められるような組織作りを考え、大学全体としてより強固な体制作りを検討していく必要があると考えられる。

参考文献

1. 佐野真理子, 吉原正治 (2004): 高等教育のユニバーサルデザイン化, 大学教育出版
2. 白澤麻弓 (2005): 「聴覚障害学生のサポート体制に関する全国調査」, (日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 事務局HP)
<http://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/xoops/>
3. 高村知子(1994): 「聴覚障害学生における講義保障に関する研究」, 愛媛大学教育学部卒業論文
4. 田中敦士, 野原奈々子 (2007): 「大学教員における障害学生への障害理解の実態」 琉球大学教育学部紀要, 71,119-146,
5. 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) HP
<http://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/xoops/>
6. 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) (2008): 「聴覚障害学生支援ガイド」, 人間社
7. 文部科学省HP: 「特別教育資料 (旧特殊教育資料)」 (1970~2007)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/013.htm